

(一財)北海道開発協会では、非営利の市民団体が行う地域活性化活動に対して平成14年度から助成を行っており、これまで150件の活動に支援を行ってきました。これらの活動がさらに発展していくよう平成20年度から助成を受けた団体の方々が活動成果等を発表し、参加者同志が地域づくりについて自由な意見交換をしていただく「助成活動発表会」を開催しています。今回は、令和3年度に助成を受け活動された6団体の成果を紹介いたします。

クローズアップ

令和4年度 地域活性化活動発表会 各地で展開する地域活性化活動をサポート

(一財)北海道開発協会開発調査総合研究所

「MAP-Muroran Art Project」鉄と光の芸術祭 ムロランアートプロジェクト 白鳥 健志氏



ムロランアートプロジェクトは、室蘭市が抱える人口減少、少子高齢化、市街地活性化など、地域課題の解消に寄与する地域の魅力発見や発信をするために結成した団体です。

今回の活動では、シャッター街となった室蘭市の中央商店街に人を呼び戻し、街の元気を取り戻すことを目的として、令和3年10月19日～10月31日の土日4日間に「鉄と光の芸術祭」を開催しました。

芸術祭の目的は、室蘭市の街なかに点在する明治後期から大正時代に建てられた歴史的建築物を利用したアートギャラリーの開催によって、市民を街へと呼び込み室蘭市の新たな可能性に気付きを与え、今後のまちづくりに寄与したいと考えるものです。このため、JR室蘭駅周辺の4か所（旧室蘭駅舎、千穂萬歳堂^{せんじゅばんざいどう}、旧丸越山口紙店、大辻医院の跡地）にギャラリーを設置しました。各ギャラリーでは、木を組み合わせた造形物に鉄に模した赤錆色や白色を着色した室蘭出身の中村岳さんの作品や、室蘭を象徴する鉄をアーティストックに作り変えた川上りえさんの作品、室蘭工業大学山田研究室の学生が卒業研究として制作したパネル展示、さらには、モノクロ写真でカモメやカラスの表情を切り取った岩崎麗奈さんの作品を展示しました。このほか、大辻医院の跡地にプレハブを設置し、サウンドアーティストの大黒淳一さんと子どもたちが、室蘭市内を歩き、町の中で収録した音をワークショッ

プを行うなどして楽曲作りを楽しみました。

期間中、ギャラリーを訪れた方たちには、まち歩きパンフレットを渡しまち歩きの促進に努めるとともに、アンケートの協力をお願いしました。

アンケート結果では、芸術祭を知ったきっかけとして新聞が一番多く、イベントの満足度も9割が満足と回答いただきました。また芸術祭のついでに室蘭駅周辺で行ったこととしては、「まち歩き」と答えた方が多く、また、この芸術祭を通じた変化としては、「室蘭の新しい魅力を感じた」「芸術文化に触れる機会が多くなったと感じた」「室蘭駅周辺に来るきっかけとなった」など、芸術祭開催のねらいとしては、ほぼ達成できたと判断しています。

今後も芸術祭を長く実施し、さらなる市民の認知度向上と、芸術文化の促進に加え、街を見つめる力を磨き上げて、室蘭市のまちづくりに寄与できるよう取り組んでいきます。

みなみ北海道サイクルツーリズム推進事業

歴史・文化を活かした南北海道サイクルツーリズム推進協議会
長沼 孝征氏



当協議会は、みなみ北海道の歴史・文化を活かしたサイクルツーリズムの推進によって、観光振興を通じた地域経済の活性化を図ることを目的に活動を行っています。

道南の渡島・檜山は、道内でも歴史が深く、北海道らしい田園・峠・海岸線など自然豊かな地形が見られます。また気候的に比較的雪の少

ない地域で、自転車に乗れるシーズンが長いなどサイクルツーリズムに最適な条件が揃っています。しかし道南にはまだサイクルツーリズムが浸透していません。

サイクルツーリズムは、サイクリング目的の観光客、特にインバウンドの増加によって地域経済に大きな還元が見込まれるとともに、SNSによる世界に向けたプロモーションも期待されます。今回はこうした活動を推進するため3つの活動を行いました。

一つ目はサイクルガイドの養成講座です。講座は日本サイクルツーリズム推進協会（JCTA）から講師を招き、2日間にわたり座学と実習を行いました。講座には、8名が参加し全員がサイクリングツアーガイド認定証（民間資格）を取得しました。

来年度には、アドベンチャーツーリズムワールドサミット北海道2023が開催されます。旅行会社では、すでに道南ルート of 視察に動いており、その基礎調査のガイド役として我々も活躍の場を広げています。

二つ目の取組みは、当協議会が独自に設定した道南サイクルルート5コース（駒ヶ岳満喫コース、檜山中山コース、恵山縄文文化コース、みなみ北海道いにしえコース、函館散走から青の洞窟クルーズコース）の資源調査を行いました。調査は、観光資源、安全面、整備状況について、実際に自転車で走行しながら確認を行います。コースは60kmから長いもので200kmあり、サイクリストの目線からの気付きが非常に重要で、調査の参加者にはアンケート調査を行い、気付いた点を詳細に把握しました。

三つ目は、情報発信です。インバウンド新時代に向けた戦略的取組として、ホームページ、パンフレットなどの更新や、サイクリストがポケットに入れて持ち歩きしやすいパンフレットとルートマップを作成しました。これらは、先の資源調査の結果を反映したものとなっています。

現在は、新函館北斗駅をゲートウェイに離島の奥尻を含めた約500kmのルートを北海道サイクリングルートへ登録することを目指して活動しています。将来的に北海道がサイクルツーリズムの聖地と呼ばれ、道南がその一翼を大きく担うように今後も活動に取組んでいきたいと思っています。

農園ガイドを通して「自然×人×まち」を繋げる

南区農園ガイドの会 吉村 卓也氏



私たちは、札幌市南区の農業地帯で活動をしています。南区の農家は、果樹栽培も盛んで小規模で少量多品目を生産する農家が多く、観光果樹園は家族連れなどにも大変人気があります。市内中心

部から車で30分のアクセスという利点と周辺の自然を活かし、この地域で農業を営む生産者との交流を促進し、地域活性化につなげる活動を行っています。

今回の活動では、農園ガイドツアーを行いました。会員の半数が農家のため、農繁期の案内役は、農家以外のメンバーが中心となりました。事前の学習等によって地域の農業の紹介や札幌で行われている農業の特徴が説明できるように対応しています。季節に合わせた果物狩り体験ツアーでは、いちご狩り、さくらんぼ狩り、ぶどう狩りなどを実施しました。通常は、制限時間内に採って帰ることしかできませんが、今回のツアーでは、果樹園の方の話を聞きながら園内を回る工程も組み入れています。

二つ目は、鹿の専門家を招きエゾシカ食害セミナーを行いました。札幌地域でも昨年は鹿の食害によって壊滅的な打撃を受けた果樹園がありました。鹿は非常に対策が難しく、地道な電気柵の対策を行うしかありませんが、講座には20数名が参加いただきました。

このほか、地域おこしと、食育を目的に「北海道スタイル」のバーベキューを広めています。これは、北海道らしさを大切に地元食材を使い、私たちホストがその良さを説明しながら焼いて提供するスタイルのバーベキューです。これからもツアーの一部として提供したいと思っています。

これに関連し、初級バーベキュー検定を6月4日に行い、検定では講義と実技を行いました。

農園ガイドでは、農家ではないが、農家に興味があり農業の楽しさを伝えるガイド育成が一番大変です。ガイドには農作物や果樹の知識が必要不可欠で、その為の勉強会や、見習いとしてガイドをしてもらいながら育成しています。

これからも農村部の隠れた魅力と食をより多くの人たちに伝え、人と自然がつながる200万人都市の利点を活かし、ふらっと来れることのできる農村を元気にする一助として活動を行っていきます。

道の駅を核とした地域活性化事業

NPO法人日本一直線道まちづくり研究会 工藤 克彦氏



美唄市から滝川市まで続く29.2kmの区間は、国道として日本一長い直線道で、その中間地点に私たちが活動する奈井江町があります。奈井江町は、かつて1万8千人が暮らしていましたが、石炭から石油へのエネルギー転換を背景に、炭鉱閉山などによって人口が減少し、現在では5,000人を切っています。私たちは、後世につないでいける地域づくりのため2003年に団体を立ち上げ、道の駅、町立の体育館、町民プールの3施設の指定管理者として奈井江町と協定を結び、管理・運営を行ってきました。今回の取組みでは、道の駅を核とした活動を行いました。

道の駅は、運転手などの休憩場所、レジャー・観光の中継地点のほか、農産物の販売など地域コミュニティとしての機能を有するほか、最近では防災拠点としても位置付けされています。

令和2年度には、地元の建設業者の協力を得て、道の駅の2階に産炭地として栄えた時代の古民家を移築し、後世の子どもたちに奈井江町の歴史・文化を伝える場所として活用しています。

今回の取組みでは、地域住民に協力をいただき、個々のアルバムを持ち寄り、当時の街並み、学校、行事などの写真を集めました。これらを基に専門家の協力を得て、奈井江町の今昔が比較できるパネルを制作し、古民家と併せた地域資料の展示を行いました。写真はデジタル化し、道の駅のデジタルサイネージでも見ることができます。

道の駅の裏には、サイクルツーリズムの一環として、マウンテンバイクで走るパンプトラックコースを造り、子どもたちに開放しています。また、空知シーニックバイウェイと連携し、石狩川サイクリングロードを

走行するサイクリストが奈井江の道の駅や、鶴沼に立ち寄ってもらえるようなマップを作成しました。

私たちが暮らす奈井江町は年々人口が減少し、何をやるにも大変な状況です。地域の様々な団体と連携し、また空知シーニックバイウェイとも協力するなど、地域の活性化に向けて取組んでいきたいと考えています。

今回の活動を契機に若い世代とのふれあいの場を提供し、次の世代の子どもたちにも取組みをつなげていきたいと思っています。

地域経済連携と他業種連携による商店街の再構築事業 紋別まちおこし塾 山中 雅一氏



紋別市内のイオン、ホームック、ツルハなどには、日常的に近隣町村から紋別市まで買物に来ています。このため近隣町村の商店では、紋別市に市場を奪われ衰退の一途を辿っています。今回の取組みで

は、これまで交流・連携が無かった西紋地域（紋別市・滝上町・興部町・雄武町・西興部町）を一つの商業エリアと捉え、紋別市内の空き店舗を活用して近隣町村の商店が交流する実験事業を行いました。

実験店舗では、まず滝上町の物産を紋別市で売ってみようと「滝上マルシェ」を開催しました。出店は5件で、宣伝方法は、新聞の折込チラシで宣伝しました。来場者は2日間で100名程度が来店しましたが、人を集める仕組みが必要と感じました。

次に「絵本の日」を開催しました。集客のため地域おこし協力隊の取組みである「子どもマルシェ」と同時に開催しました。出店は11の個人と団体で宣伝方法は滝上マルシェと同様、新聞の折込チラシです。企画は、若い主婦のグループが考え、当日は親子連れなど1日で100名が来店されました。

「絵本の日」の第2弾として「絵本とクリスマスの日」を開催しました。出店は12の個人と団体で、宣伝方法はSNSによる発信と出展者によるチラシ配布で行いました。今回は、イベントの自立運営を検討するため出店料を徴収しましたが、各店舗では出店料が賄える程度の売上しかなく、開催期間として2日程度必要と感じました。

紋別港まつりが2年ぶりに開催されたことから、この事業に参加し、「オホーツク屋マルシェ」を開催しました。土日2日間の開催でしたが310名に来店いただきました。

各実験店舗の事業を終え、今後の活用方法について、4つの店舗活用のパターンを提案しました。その他、情報収集事業、レシピの開発、空き店舗の片づけの活動を行いました。

今後も事業と担い手を発掘し、実証実験によって、事業化の可能性が見込まれる際は、空き店舗を活用した事業を行います。既にVRソフト会社が実験店舗でのVR体験会が好評だったことから、現在、VR教室を開業しています。

最後に紋別市の商店街活性化の取組みとして、2022年7月にまちなか交流スペース「タタラバ」が中心市街地の商店街にオープンしました。この施設は、「みんなのマチナ化プロジェクト（本部長：紋別市長）」が運営しており、プロジェクトリーダーは、マチゼミを主導してきた当団体の事務局長が中心となり、その実行スタッフとして私たちも関わることとなっています。

当団体は、こうした活動なども含め、今後も商店街の再構築に向けた活動を行っていきたいと思います。

食を通じた地域プロモーション「釧路のロングヒットフードブック」制作プロジェクト

クスろ 須藤 か志こ氏



クスろは、釧路の再発見と新たな角度から再編集する活動を行っています。2014年～2017年までは釧路で様々な活動をする人々の紹介と、会える場所作りの取組みに注力し、ウェブサイトによる発信とともにフリーペーパー（11号まで）を作成し釧路管内で配布をしました。2015年から2017年には、釧路のファンを増やすため、釧路の魅力的な人に出会うツアーを実施しました。クスろの活動基盤と宝は、こうした取組みの過程で得た魅力的な人々とのつながりです。

2018年は、クスろのイラストでグッズ作りを始めました。「釧路のおふざけキーホルダー」というタイト

ルの商品6種類を作り、この内「無量寿^{むりょうじゆ}そば」のキーホルダーが、その後大きなムーブメントを起こします。

無量寿そばは、老舗のメニューにも関わらず、あまり注目されていませんでした。しかしキーホルダーの販売をきっかけに、SNSで大きな反響があり、売り上げも2倍になったと店主から聞いています。また、雑誌でも大きく取り上げられ、ローソンでは、無量寿そばの関連商品が発売されました。

こうした背景から、釧路市内などの小・中学校で授業をする機会をいただいたのですが、学生から他のローカルフードについて聞かれたことで、釧路にはまだ知られざるローカルフードが数多くあることに気付かされました。このため、ソウルフード、ローカルフードとも違う、長く愛されてはきたが、日の目を見なかった食を発掘し、釧路のロングヒットフードとして2021年からアーカイブに加えてきました。

今回の取組みでは、アーカイブを基にロングヒットフードの書籍を制作しました。食の紹介のほか、移住者との対談も掲載しています。この企画では、釧路のオリジナル給食に注目し、釧路市で元給食スタッフとして働いた方のご自宅に伺い、当時の給食を作ってもらって紹介しました。また、元々デパートでも売られていた「とりめん*」の惣菜など、地元の人が普段使いで食べていた料理も紹介しています。

書籍の制作にあたり、SNSで愛されてきた食のアイデア募集をしましたが、すでに無くなった店のメニューや、カメラが普及してない時代のメニューの投稿も多く、詳しくお話できる方に会えなかったり、再現が難しかったものもありました。

クスろは、釧路の新しい発見と新しい価値を大事にしており、今まで表に出ていなかった情報をまとめることができよかったです。今回の書籍は、主に釧路の子どもたちに配布しましたが、今後は一般発売できるようクラウドファンディングを活用して、レベルアップした書籍を制作したいと思っています。

※地域活性化活動発表会は、2022年11月24日に「かでの2・7」で開催しました。

* とりめんは、釧路市「こがねちゃん弁当 双葉店」で販売する、小麦粉と刻んだ玉ねぎと鶏肉を丸め油で揚げた惣菜。